

平成22年6月28日現在

研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19520246  
 研究課題名（和文） 英語圏児童文学における食と身体性：歴史的・社会的観点からの考察  
 研究課題名（英文） Representation of Food in English Children's Literature: A Historical and Cultural Study  
 研究代表者  
 川端 有子（KAWABATA ARIKO）  
 日本女子大学・家政学部・教授  
 研究者番号：80224830

## 研究成果の概要（和文）：

本研究は、英語圏児童文学における「食」の表象を、歴史的、かつ共時的に探り、分析することを目的として、児童文学の中に描かれた食物とそれに対する態度、食べることにまつわる文化現象全体、その意味と負わされた役割を探ろうというものである。そのために歴史的軸として、19世紀から21世紀までの英語圏の児童文学から例を抽出し、食とその身体性へのかかわりが、倫理的・教育的・宗教的背景の移り変わりと共にどう描かれてきたかを考察している。

## 研究成果の概要（英文）：

This study explores how attitudes around “food” and “eating” are represented in children’s literature written in English spoken countries through history as well as contemporary framework. It aims to bring about the roles of food and eating behaviors in the targeted culture. Examples are taken from 19 century to 21 century literature, and they are considered against the ethical, educational, and religious background with accordance with the food and body relationship.

## 交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008年度	700,000	210,000	910,000
2009年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	2,300,000	690,000	2,990,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：英米文学

キーワード：英米文学、児童文学、比較文学

## 1. 研究開始当初の背景

児童文学に食の表象が多く現れることは広く観察されていたが、学問的にそれを研究する論文や著作はまだそれほど現れておらず、とりわけ食の表象と家族、身体論などのか

かわりには豊かな論点が残されていると思われた。研究代表者は、2004年度、白百合女子大学大学院児童文学研究科の修士、博士に対する授業（非常勤）でこのテーマを取り上げて以来、その授業に出席していた大学院

生、白百合児童文化研究センターのメンバーなどを中心に **Food for Thought** と題したプロジェクトを立ち上げ、研究会を重ねてその成果を『子どもの本と＜食＞物語の新しい食べ方』(川端 有子・西村 醇子 共編著を著していた。今回の科研費を取得して、新たにメンバーも増やし、第二期プロジェクトとして研究活動が開始されたのであった。

## 2. 研究の目的

18～19世紀の児童文学の創設期から現在に至るまで、主として英語圏の児童文学を通時的、共時的に考察し、そこに現れる食の表象を分析し、どのような役割を果たしているかを突き止める。研究協力者は研究会で発表をすると同時に、外部の学会等などでもシンポジウムなどを開き、児童文学における＜食＞の表象の重要性をアピールしようと試みた。

## 3. 研究の方法

一か月に一度、研究会を開き、研究者同士交流と情報交換、講演会などを催し、討論をかわす一方、学会で発表しその成果を論文化する。

英国ロマン派研究者、植月恵一郎氏には、ビアトリクス・ポターの『ピーターラビットのおはなし』における食べることと食べられることについての講演をしてもらった。比較文学研究者、福田真人氏には近代日本文学における食表象について話を伺った。日本児童文学の研究者、宮川健郎氏には宮沢賢治の作品、とりわけ「よだかの星」「ゆきわたり」「注文の多い料理店」を中心に話を伺い、宮沢賢治と英語圏児童文学の相互影響、宮沢賢治の思想性、また、そのほかの賢治作品をも＜食＞で読み解くことの可能性を示唆してもらった。

## 4. 研究成果

3年間にわたり、研究協力者と一ヶ月に一度研究会を開き、日本の児童文学や比較文学、文化人類学など隣接領域の専門家の講演を聞いたり、参考文献の解読を行ったり、各自の専門分野からの考察を発表、意見交換をしてきた。

児童文学の創生期から、現在に至るまでの諸作品を抽出して、＜食＞という観点から考えた結果、質素堅実を説くピューリタニズムの影響、ロマン派の子ども理想化、産業革命以後の英語圏文化が精神性と物質性の二項対立にどう対処してきたかという問題、子どもの身体性への意識の変遷、英語圏におけるエスニック・マイノリティの増加とその表象が食と深く関わっていることなどが判明した。

3年目には偶然であるが、英語圏でもこの

テーマに注目が集まり、論文集 *Critical Approaches to Food in Children's Literature* (Edited by Kara K. Keeling and Scott T. Pollard, New York: Routledge, 2009) が刊行され、この研究が海外のコンテンツポラリーな批評シーンでも重要な主題として扱われていることが明らかになった。

研究会の最後はこの論文集を読んで討論することで締めくくられた。ここに収められた論文は、児童文学作品のスピンオフとしてのクックブックの分析、ティーンエイジャー向けの物語における料理と消費のポリティクス、絵本の分析、少年主人公の肥満と多食、帝国主義的冒険小説における食の意味、アジア系アメリカ人の食文化の摩擦と自国アイデンティティの形成、アイルランドのジャガイモ飢饉を描く歴史小説分析、ラティノー、ヒスパニック系の民俗学に基づく児童文学作品研究など多岐にわたり、このテーマの広さを感じさせた。しかし、えてしてステレオタイプな分析や＜食＞に関するテーマはただのこじつけである場合もあり、これから研究協力者各自のテーマに沿った発展の余地は十分残されている。

研究の成果は、具体的には国内の学会での口頭発表、論文発表により、新たな視座で児童文学を読む可能性を示した。発表等でとりあげた作品は、古典ではルイス・キャロルの『不思議の国のアリス』『鏡の国のアリス』、戦時下の非常時の食の共同体という特殊な状況を扱ったロバート・ウェストールの『海辺の王国』である。

前者は、ヴィクトリア朝時代、小食であることが女らしさの印であるとされていたのにもかかわらず、キャロルの主人公アリスが子どもらしい好奇心いっぱい、文字通り不思議の国を味わいつくしていくさまを分析し、この作品がイギリスの児童文学で初めて、多様な味覚についての描写をもって登場したことを証明した。＜食う／食われる＞の比喩が多用されるのもまたこの作品の特徴である。しかしながら、鏡の国の最後では、大人になりかけた主人公アリスが、大人の女性になるということは食べる主体から、食べられる客体に墮ちることであることを悟り、自ら食卓を覆して夢を終わらせるという点が示唆的である。

後者は、第二次大戦中のニューカッスルに近い海辺の町で、たまたま空襲で家族を失った少年が、イヌを一匹道連れに海沿いの道を北にさかのぼり、自分のいるべき場所を模索するというロードムービー的な構成の物語であるが、その中に、様々な人との出会いがどれも独特の＜食べ物＞と結びついていることを検証し、サバイバルの食、性的誘惑のわなとしての食、食とジェンダー、共に食べ物を分かち合うことで生まれる絆などを明

らかにしていった。ちょうど児童文学と YA 小説の境界線上に位置しているこの作品には、明らかに食と性のつながりも見取れた。

また、論文に起こせるほど大きくはないテーマについては、『<もの>から読み解く世界児童文学事典』(川端有子・こだまともこ・本間裕子・水間千恵・遠藤純共著、原書房、2009)の中の「食べるもの」の章に事典形式でまとめることができた。「アスピリン」「アンパン」「エール」「きつね丼」「熊の肝」「クリスマス・プディング」「子牛の足のゼリー」「粉ミルク」「笹飴」「サフラン・ケーキ」「シュトルーデル」「ターキッシュデライト」「タッフィー」「タマネギ」「ダンプリング」「タンポポのお茶」「トード・イン・ザ・ホール」「夏みかん」「パイ」「麦芽エキス」「バターミルク」「ヒカマ」「ベーグル」「ベーコン・エッグ」「ペミカン」「ホムス」「マーマイト」「ママレード」「みつまめ」「ムラサキインゲン」「ライムの塩漬け」「リコリス飴」「レープクーヘン」「ロールキャベツ。以上の食物は、特定の児童文学作品に登場する印象的な食べ物であると同時に、その作品のテーマを暗に示す指標ともなっており、この事典では左右見開き一ページに一作品・一食品を絵か写真で紹介し、さらにその作品とのかかわりを検証している。

さらに、報告書作成時にはまだ準備中であるが、次には現代のイギリスのティーンエイジャーに圧倒的な人気を誇るジャクリン・ウィルソンの作品を取り上げる予定である。シングルマザーや離婚家庭、社会の最底辺に生きる孤児、家庭内暴力の被害者であるなど、困難な状況にある現代の子どもたちを主人公にするウィルソンの作品から、孤食、ジャンクフード、ダイエット、過食、食卓の存在、不在、家族、友情の問題などの現代ならではの食に関する主題を読みとっていくという試みである。これは7月に日本児童文学学会の東京例会で口頭発表し、その結果を論文にまとめ、日本女子大学家政学部の紀要に投稿する予定である。

国外への発表はまだこれからの課題であるが、2012年オーストラリアで行われる国際児童文学研究学会での発表を目指して、今度はコンテンポラリーの児童文学をターゲットに考察を進めていく予定である。

また、各研究協力者もそれぞれのフィールドで研究会の成果を生かして発表・執筆に励み、今後『子どもの本と<食>』第二弾という目的に向かって努力したいと考えている。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

① 川端 有子、<食>の共同体を巡って—ロバート・ウェストールの『海辺の王国』—、日本イギリス児童文学会紀要 *Tinker Bell*、査読有、No. 55、2010、pp. 13-26

② 川端 有子、アリスは食べるのか、食べられるのか—不思議の国・鏡の国における捕食関係の意味、日本イギリス児童文学会紀要 *Tinker Bell*、査読有、No. 54、2009、pp. 1-14

[学会発表](計3件)

① 川端 有子、個人発表、ロバート・ウェストールの『海辺の王国』再考：食の共同体を考える、日本イギリス児童文学会2008年全国大会(於 清泉女子大学)11月

② 川端 有子、アリスは食べるのか、食べられるのか：Dinner and Diner in *Alice's Adventures in Wonderland and Through the Looking Glass* 日本イギリス児童文学会2007年大会(於 中京大学)11月

③ 川端 有子、講演、食卓をめぐるおとなと子どものパワー・ポリティクス：『アリス』と『ピーター・パン』の場合 関西学院大学英文学会春の例会2007年6月

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

川端 有子 (KAWABATA ARIKO)  
日本女子大学・家政学部・教授  
研究者番号：80224830

### (2) 研究分担者

なし

### (3) 連携研究者

なし

### (4) 研究協力者

内藤 貴子 (NAITO TAKAKO)  
白百合児童文化研究センター・研究員  
本間 裕子 (HONMA HIROKO)  
明治大学等・非常勤講師  
鈴木 宏枝 (SUZUKI HIROE)  
東京女学院短期大学・国際教養学部・講師  
永島 憲江 (NAGASHIMA NORIE)  
白百合児童文化研究センター・研究員  
山本 麻里耶 (YAMAMOTO MARIYA)  
白百合児童文化研究センター・研究員  
谷村 知子 (TANIMURA TOMOKO)  
白百合児童文化研究センター・研究員  
佐々木 由美子 (SASAKI YUMIKO)

鶴川女子短期大学非常勤講師  
浅木 尚実 (ASAGI NAOMI)  
白百合児童文化研究センター・研究員  
植月 恵一郎 (UETSUKI KEIICHIRO)  
日本大学・芸術学部・教授  
水間 千恵 (MIZUMA CHIE)  
国学院大学等・非常勤講師  
吉村 健一 (YOSHIMURA KENICHI)  
大阪電気通信大学等・非常勤講師  
宮川 健郎 (MIYAGAWA TAKEO)  
武蔵野大学・文学部・教授  
福田 真人 (FUKUDA MAHITO)  
名古屋大学・国際言語文化研究科・教授